慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	101年目以降を考えるための7つの質問 : 今、ファンはこう感じている
Sub Title	Seven questions for the Takarazuka's future
Author	中本, 千晶(Nakamoto, Chiaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.108, (2015. 6) ,p.110 (131)- 121 (120)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2014年度藝文学会シンポジウム「タカラヅカ100年!」 開催日: 2014年12月12日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01080001-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

101年目以降を考えるための7つの質問 ── 今、ファンはこう感じている

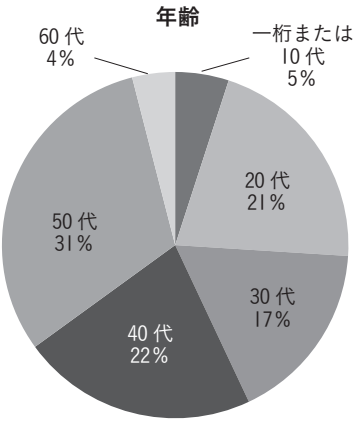
中本千晶

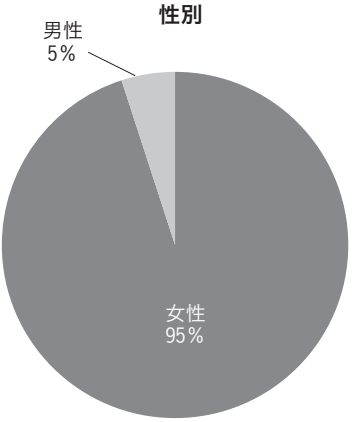
熱狂的と言われる宝塚ファンについてのお話をしてみようと思います。せっかくの機会ですので、客席参加型の形式で進めていきます。そこで、「101 年目以降を考えるための 7 つの質問 ── 今、ファンはこう感じている」を用意しました。ちなみに、会場のみなさんはどのくらいの頻度で、宝塚をご覧になるでしょうか。年に 10 回以上という方は？　（会場では少数）。

質問は次の 7 つです。

1. 現在のタカラヅカの上演作品には「男女の愛」が必須ですが、この傾向は今後も続いていくべきだと思いますか？
2. 近年のタカラヅカでは「日本物」の上演回数が減少傾向にありますが、この点についてどう思いますか？
3. フィナーレの「黒燕尾」の場面が昨今増えていることについてどう思いますか？
4. トップスターを組の頂点とする現状のスターシステムは今後も維持していくべきだと思いますか？
5. トップコンビ制について、どう感じていますか？
6. 宝塚歌劇は今後、どのようなファン層を開拓すべきだと思いますか？
7. 宝塚歌劇は今後、海外公演を積極的に行っていくべきだと思いますか？

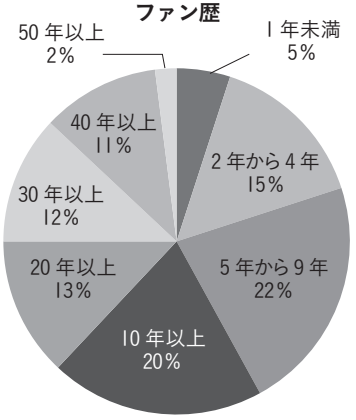
回答者の属性

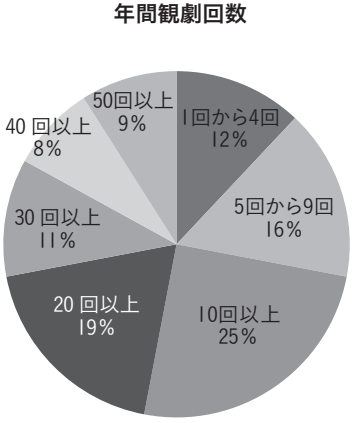




若い世代がやや多め？　50 代の多さも目立つ。
20 人に 1 人が男性 !!

回答者の属性





ファン歴は新しい人から長い人まで。
大劇場公演各組 1 回＋α のファンが中心

これらをウェブサイトやSNS上で拡散し、回答していただくというかたちで12月1日から8日まで行いました。その際、任意のフリーコメント欄を設けましたが、そちらにも多くの回答がありました。回答者の多くは、現在、宝塚ファンのメインと考えられる30～40代という年齢層ですが、20代、50代の方もかなり多くいました。回答者全体の5%は男性でした。年間の観劇回数は、数回から40、50回まで、幅は広いのですが、10～20回の回答が最も多く、大劇場公演はだいたい1回ずつ、その他の劇場の公演に関しては気に入ったものを観る、といった感じのようです。

さて、それでは早速、問1に入っていきたいと思います。

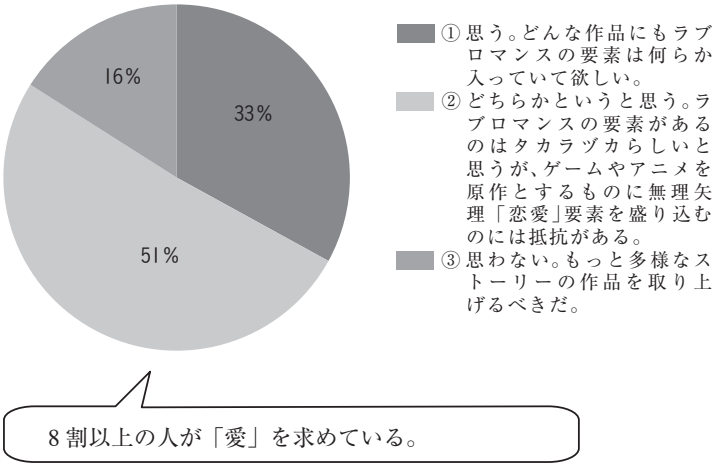
◆問1：現在のタカラヅカの上演作品には「男女の愛」が必須ですが、この傾向は今後も続いていくべきだと思いますか？

◆回答

①どんな作品にもラブロマンスの要素は何らか入っていて欲しい。

②どちらかというと続いていくべきだと思う。ラブロマンスの要素があるのはタカラヅカらしいと思うが、ゲームやアニメを原作とするものに無理矢理「恋愛」要素を盛り込むのには抵抗がある。

③思わない。もっと多様なストーリーの作品を取り上げるべきだ。



結果としましては、8 割以上の方が、何らかの恋愛要素を求めているようです。

①と回答した方のコメントでは、「やっぱり、『愛あればこそ』がタカラヅカ！」、「夢の世界だから、現実離れした純愛ものが見たい」、「上質な疑似恋愛できる幸せを求めて！」、「男役と娘役という宝塚独特のシステムが活きる」、「ラブロマンスは人間の一番の関心事」などの意見がありました。

次に②では、「原作にない恋愛要素を盛り込むのは、原作が好きな人にとってはショックが大きい」。これはゲーム『逆転裁判』（2009 年に宝塚でも舞台化）ファンの方から多くあったコメントです。逆に「恋愛要素の少ない『銀河英雄伝説@ TAKARAZUKA』（2012 年宙組）や、『Shall we ダンス？』（2013 年雪組）なども、私は面白かった」という意見、「いつまでも恋愛だけの題材だとつまらない」。意外と多くあったのが、「男同士の愛など様々な愛の形を取り上げてもいい」という意見。大劇場はともかく「バウホールなどではいろいろな挑戦をして欲しい」、「でも…宝塚の美しすぎる恋愛要素がなくなるとやはり寂しい！！」などでした。

③の回答者からは、「ラブは必要だけどロマンスはどうでもいい」、ここでも再び「男同士の友情にグッと来る方なので、ラブロマンスが一番だとは思わない」という意見や、「女性主役の物語が見てみたい…！！」、「面白くて家族で観られる物であればなんだっていいのではないかと思います」。「最近『型』にハマり過ぎていて観ていても窮屈さを感じる事が多いので、もっと貪欲に挑んでいく作品が観たい」などのチャレンジ志向の意見もありました。

以上の結果と年齢層・ファン歴との関連も調べてみたところ、私も意外に思いましたが、年齢が上の方、またファン歴が長い方が、より恋愛要素を求める傾向があるようです。若いファンのほうが愛を求める割合が多いかと予想していましたが違っていました。

◆問２：近年のタカラヅカでは「日本物」の上演回数が減少傾向にありますが、この点についてどう思いますか？

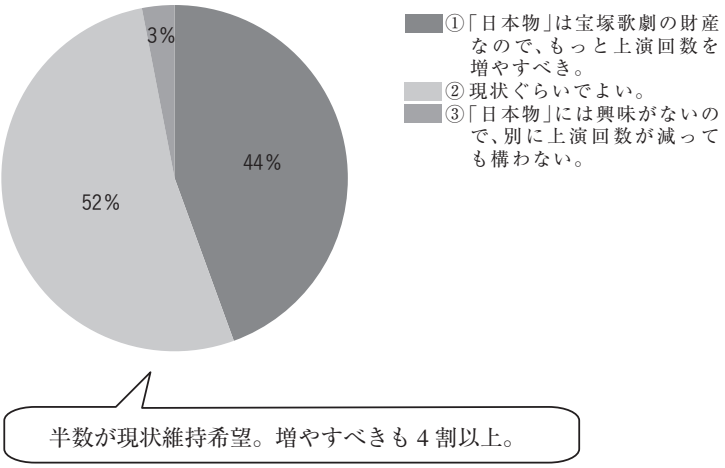
◆回答

①「日本物」は宝塚歌劇の財産なので、もっと上演回数を増やすべき。

②　現状ぐらいでよい。

③「日本物」には興味がないので、別に上演回数が減っても構わない。

結果は、これも意外かもしれませんが、半数が現状維持を支持、4 割ほどが増



やすべきという答えでした。ただし、この手のアンケートでは、③は選びにくいような気もします。また、私は『タカラヅカ流日本史』を出版しており、こうした著作を持つ私が集めたアンケートの回答者ですので、日本物を好きな傾向があるかもしれません。①の回答者のコメントは、「華やかな日本物を上演出来るのは宝塚だけ」、「翻訳ミュージカルなら東宝ミュージカルでもできるけれど、和物ミュージカルは宝塚にしかできない」、「日本の文化って素晴らしいなと実感できる」。他に、「日本物は面白く、ネタも豊富」という意見があり、「日本史でまだ取り上げていない人物や出来事もあるから、開拓して欲しい」、「日本物は、年月が経っても忘れられない秀作が多い。日本人の心の琴線に触れる」、あるいは「渡辺武雄先生がつくられた郷土芸能のシリーズを復活させて欲しい」、「面白いものを創り、きちんとやりこなせれば、日本物は退屈じゃない」などがありました。今年上演された『心中・恋の大和路』、『一夢庵風流記　前田慶次』（共に雪組）を観劇して、日本物の面白さを再認識したという声や、「数年前よりは日本物の数が復活してきたように思い、歌劇団の心意気を感じています」という意見もありました。伝統を継承していくことで、経験・技術の継承にもつながるという声がある一方で、しかし「出来る役者が揃った組でやってほしい」という思いもあるようです。「新作を書ける作家も育てて欲しいです」という声もありました。

②の回答者のコメントでは、「日本物はあまり得意でないが、宝塚は日本の

財産だと思うと大切にしたい」、「日本物も大好きだが、やはり宝塚では『男役』『スーツ』『コスチューム』が観たい」、「個人認識がしにくく、眠くなる率が高い」、「お芝居はいいのですが、ショーだと眠くなります……」などがありました。

「日本物の雪組」に関しては、「壮一帆さんトップの時代に「日本物の雪組」が復活したのは素晴らしいこと」、「一つの組に偏るのではなく、均等にやって欲しい」、「なくすのはいやだけど、自分が応援する組が日本物ばかりになったらいやだ」といった意見の一方で、「日本物に特化する組があっても良いと思う」など様々な意見がありました。

作品と演者の組み合わせについては、「似合わない人に無理矢理させるのはどうか」、「増やすのだったら技術向上が必須」、「生徒さんのスキルや経験を考えると、今より減らせば質の低下を招く」、「日本物・洋物にこだわらず完成度の高い作品が見たい。作品力です！」などの意見もありました。

少数ながら、③の回答者からのコメントでは、「すみません、素晴らしい伝統芸能だとは思いますが、個人的にひかれないです。前田慶次みたいなものは大歓迎」というものがありました。

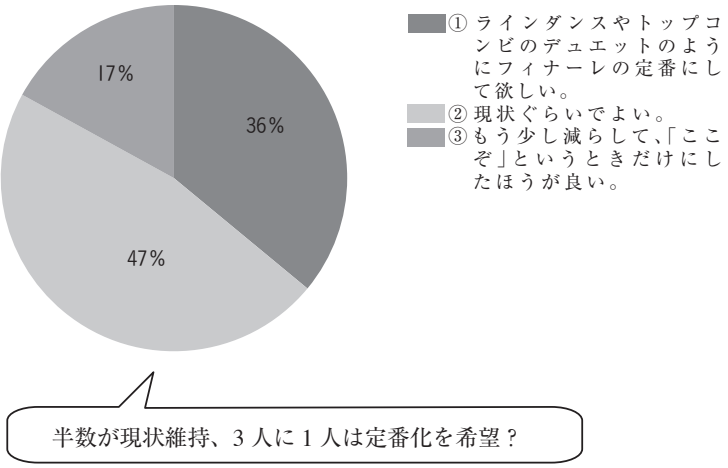
この質問も、年齢層とファン歴の相関関係を確認してみましたが、予想通り、50、60 代が日本物を好む傾向が強く、意外にも 20 代が 3、40 代よりも日本物を好む割合が大きかったです。推測ですが、歴女効果なのでしょうか。実際、『戦国 BASARA』（2013 年花組）なども上演されており、今後、受け入れられていく余地はありそうです。ファン歴との相関関係ははっきりしていて、ファン歴が長い方が日本物を好む傾向にありました。これは、昔のほうが日本物の上演が多く、その頃の作品が記憶にあるからだろうと思われます。

◆問３：フィナーレの「黒燕尾」の場面が昨今増えていることについてどう思いますか？

これは 2008 年頃から増えていて、現在は 2 公演に 1 回くらいの割合です。サヨナラ公演ではほとんど定番となりつつあります。

◆回答

①ラインダンスやトップコンビのデュエットのようにフィナーレの定番にして欲



しい。

②現状ぐらいでよい。

③もう少し減らして、「ここぞ」というときだけにしたほうが良い。

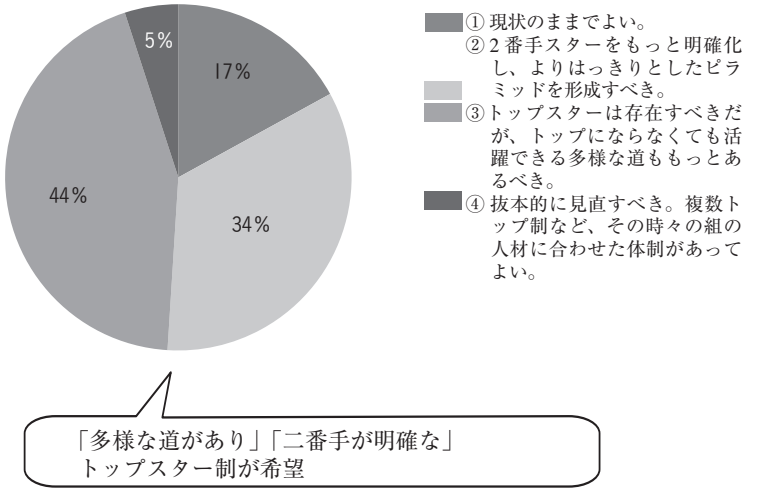
①の定番化を望む方が、3 人に 1 人くらいの割合です。「黒燕尾をすでに宝塚の象徴、定番と捉えている」、「組の男役の最大の見せ場」、「組同士で比較したい」という声がある一方で、②の回答者からは「退屈になる」、「黒燕尾に頼りすぎてしまう」という懸念もありました。③では、「黒燕尾という伝家の宝刀も抜きすぎてはなまくらになる」、「黒燕尾が増えたぶん、扱いが雑になっている」、「今後の成長の妨げになるのでは」といった意見がありました。

年齢層との相関を見ると、若い世代に黒燕尾ファンが多かったです。ファン歴で見ると、ファン歴がまだ浅い方は、黒燕尾の定番化を希望する割合が多く、ファン歴 10 ～ 29 年の層では、「ここぞという時での黒燕尾」を望む声が多くありました。

◆問 4：トップスターを組の頂点とする現状のスターシステムは今後も維持していくべきだと思いますか？

◆回答

①現状のままでよい。



② 2 番手スターをもっと明確化し、よりはっきりとしたピラミッドを形成すべき。

③トップスターは存在すべきだが、トップにならなくても活躍できる多様な道ももっとあるべき。

④抜本的に見直すべき。複数トップ制など、その時々の組の人材に合わせた体制があってよい。

多数派は②で、抜本的な見直しを望む声は多くはありませんでした。①の回答者のコメントは、「基本的にトップスターシステムは前提としたままが良いが、現実的に難しく、2 番手以下が不明瞭になるのは仕方ない」、「試行錯誤していることはすでに理解している」という意見がありました。

②の回答者は、「はっきりとしたピラミッド制を望む」、「出演者側もその方が楽ではないか」といった意見がありました。また 2 番手の重要性に注目し、「トップとの対比がおもしろい」、「まともな 2 番手経験なしに立派なトップスターになるのは難しい」、「トップから 2 番手へと次期トップが引き継がれる形を『組ファン』は望んでいる」といった声もありました。

③では、トップ制度は存続希望だが、その一方で「能力があり魅力的なジェンヌさんが『路線から外れた』というだけで活躍の場が縮小するのは惜しい」、「形

式に縛られすぎると舞台が退屈になる」という懸念もあり、「以前は、トップ以外はもっと混然としていた」という対照的な意見もありました。

④のコメントでは、「それぞれの個性・適性にあったキャスティングが阻害されている」、「現状のスターシステムは完成したものだが、時代にあわせて柔軟にすべき」という意見もありました。

この問に関しては、年齢層との相関関係が顕著に出ました。若年層では、はっきりとした階級を望む声が多くありました。若い方は、未来がシンプルでわかりやすい方がいいのでしょうか。上の世代にいくにつれて、徐々に減少傾向にあります。ファン歴との相関関係で見ると、ファン歴が長い方のほうが多様な活躍を望む傾向があり、1974年の『ベルサイユのばら』以前の、現在のスターシステムができる前の時代をご存知の方もいるためかと思われます。

◆問５：トップコンビ制について、どう感じていますか？

◆回答

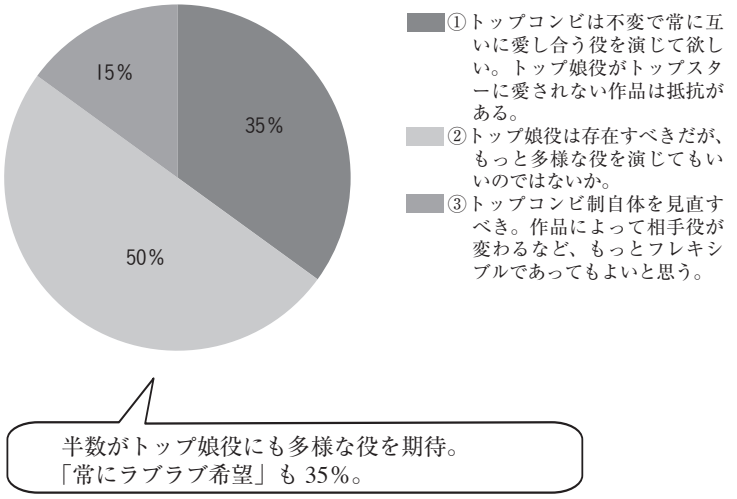
①トップコンビは不変で常に互いに愛し合う役を演じて欲しい。トップ娘役がトップスターに愛されない作品は抵抗がある。

②トップ娘役は存在すべきだが、もっと多様な役を演じてもいいのではないか。

③トップコンビ制自体を見直すべき。作品によって相手役が変わるなど、もっとフレキシブルであってもよいと思う。

結果は、半数が②を支持しましたが、①を支持する方も35％いました。①の回答では、トップコンビ制を、「これぞタカラヅカ！」と考えるファンが多数いるようで、「トップ娘役のいない公演は不安定に感じた」という声がありました。②では、「トップ娘役の個性を活かす配役の可能性を期待」、「作品によっては相手役が変わるのもアリではないか」という声もありました。現在は、若いトップコンビが多く、以前のように大人っぽいコンビを希望する声や、そういった傾向に懸念を持つ声も少なくありませんでした。

少数派ではありましたが、③の回答のコメントには次のような興味深いものもありました。「今のトップコンビ制度は離婚や別居が簡単にできてしまう現代のアンチテーゼですよね。でも、そもそも、いいコンビは作るのがとても難しいですよね？　無理やり作るのは、どうかなーと常々思っています。独身でええわ



い！みたいな主役がいても良くないですか？」。これは面白かったです。

こちらもはっきりした相関関係が出ていて、若い世代はラブラブなコンビを望む傾向があり、3、40 代の方で、②を回答する方が 6 割いました。これは私の考えですが、結婚し、仕事でも自己実現をしたい、という理想が投影されているのかもしれません。ファン歴との関係では、ファン歴が長い層では、③の回答が意外にも多く、また中間層では、②の回答が多数を占めました。

◆問 6：宝塚歌劇は今後、どのようなファン層を開拓すべきだと思いますか？

◆回答

①若年層

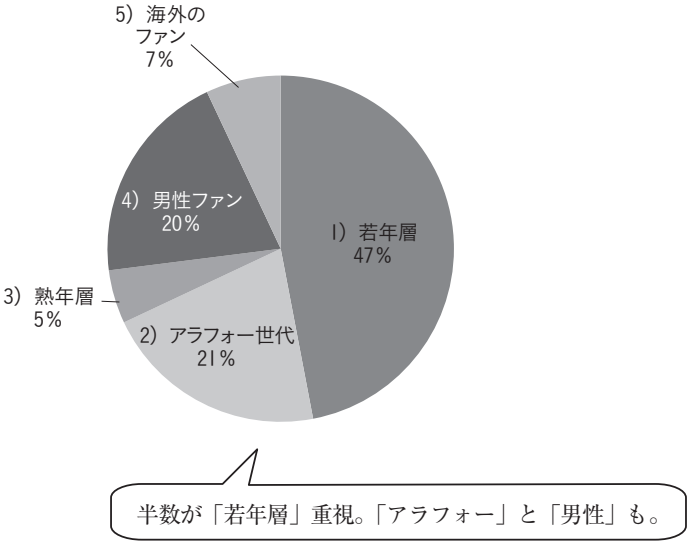
②アラフォー世代

③熟年層

④男性ファン

⑤海外のファン

予想通り①がもっとも多く、次に②、④と続きました。やはり、宝塚の将来を考えての結果が反映されました。「自分の首を絞める発言だが、観客が 40 ～ 50



代女性が大半を占めるのは未来に向けてまずい」、「現状のチケット料金では難しい」といった意見がありました。②の回答者は、「宝塚ファンになることのできる環境が整っている」という意見がありました。「適度にチケット購入力があり、また、入り出などの過酷な状況にも耐えうる体力もあるので、総合的にみて『戦力』になると思う」という意見がありました。あとは、「他の世代を連れて来てくれる可能性がもっとも高いだろう」という意見。③の回答者のコメントでは、「古参のファンを大事にして欲しい」という声がありました。④では、「食わず嫌いはもったいない」、「ヅカ男子が増えればいい」という声や「娘役によりスポットがあたるようになるのでは」などがありました。⑤では、「宝塚のすばらしさを世界に向けて発信すべき」、「残りの市場として海外に進出するしかない」などのコメントがありました。

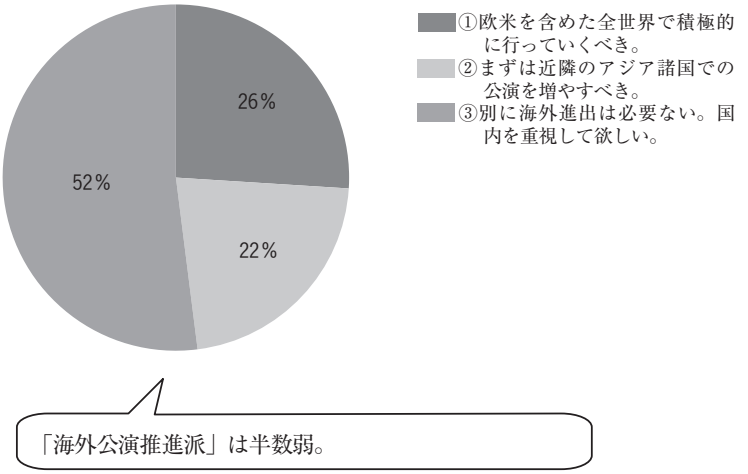
◆問７：宝塚歌劇は今後、海外公演を積極的に行っていくべきだと思いますか？

◆回答

①欧米を含めた全世界で積極的に行っていくべき。

②まずは近隣のアジア諸国での公演を増やすべき。

③別に海外進出は必要ない。国内を重視して欲しい。



①が半数、②、③が残りを半分ずつでした。これを多いと見るかどうかですが、基本的に、私たちが国内のファンなので、①が大多数を占めるのも難しいかと思います。

③のフリーコメントで失礼ながら面白かったのが、「外国でウケるより国を見ろよ！」というもので、『エリザベート』の歌詞からのものでした。

まとめますと、ニーズが多様化していて、かつ、それらが相容れないものであるように感じました。観客の年齢層が幅広くなっていて、価値観も多様化しているようです。しかし、宝塚を愛する気持ちは共通しています。また、各々の人生や恋愛における価値観とは異なる基準で、劇団がジャッジを下した場合に、観客は観劇を通して、自身の価値観が揺さぶられることもあるようです。100 周年を迎えるにあたって、未来を考え、勇気ある決断が劇団に必要とされることもあるかもしれません。本日会場にお集まりの皆さんと共に、多様性を認め合って、宝塚を応援していければと思います。